京都建築事務所

想いをカタチに、想い以上の感動を

株式会社　京都建築事務所
代表取締役社長　細見 建司

〒604-8083
京都市中京区三条通柳馬場東入
中之町 10 番地
TEL:075-211-7277
FAX:075-211-7270
http://www.kyoto-archi.co.jp/

医療福祉施設の新築、増築、改修等、お気軽にお問合せください。

高齢者の仕事と生活に関する実態調査報告書 販売のご案内

定価 2,000 円（税込・送料別途）

調査報告書には、全国から 1784 の回答をいただいた 1 次調査の概要と結果、2 次調査の概要とともに、高齢者の労働と生活に対する分析結果が示されています。

※調査報告書をご希望の方は、右の QR コードよりお申込みください！
詳細は、お申込みフォームより案内いたします。

報告書購入用

****

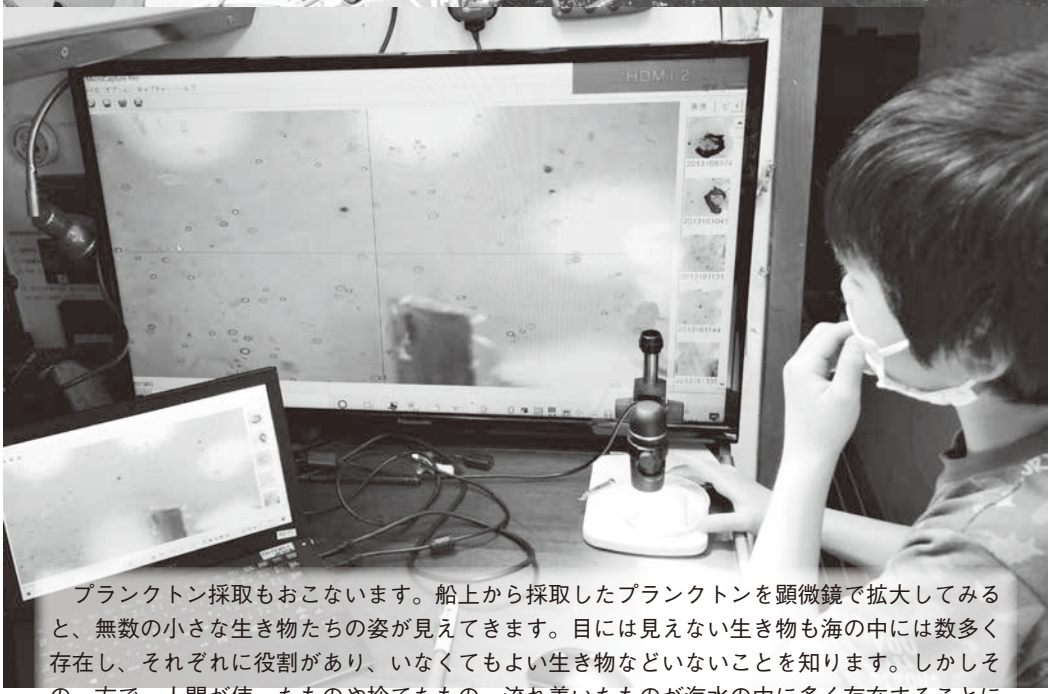
【問合せ】総合社会福祉研究所　TEL06-6779-4894　FAX06-6779-4895
http://www.sosyaken.jp/　E-mail:mail@sosyaken.jp

すべてのいのちに役割がある

私は、環境NPO法人「気候危機対策ネットワーク」を立ち上げ、海岸生物観察会を30年ほどつづけています。「大潮」の干潮時は海が引き、波に打たれる心配がなく、安全に磯の観察ができる絶好の機会です。潮だまりにいる生物を採取し、その生態について解説したり、名前を知ってもらったりすることで、子どもも大人も夢中になり、自然への関心が自然と深まっていきます。採取した生物は、観察後すぐに海へ帰します。

海で育った子どもたちは、成長とともに海辺の生物への知識や興味を広げていきます。この過程で大切なのは、図鑑などで生物の特徴や生態について調べ、知識を深めること。そして、その楽しさや命の大切さを人に伝える役割を担うことです。写真の一番右の子は、いつの間にか私の助手として頼もしい解説員になっているではありませんか！

夏休みには「体験乗船会」で子どもたちとヨットに乗り、みんなで帆（セール）をあげて風の力だけで走る船を体験します。かけ声とともに力を合わせてあげたセールが風をはらみ、エンジンに頼らず自然のパワーで静かに動き出す瞬間は、自然と共に生きる感覚を実感する時間です。



プランクトン採取もおこないます。船上から採取したプランクトンを顕微鏡で拡大してみると、無数の小さな生き物たちの姿が見えてきます。目には見えない生き物も海の中には数多く存在し、それぞれに役割があり、いなくてもよい生き物などいないことを知ります。しかしその一方で、人間が使ったものや捨てたもの、流れ着いたものが海水の中に多く存在することにも気づきます。この体験は、人と自然、生き物との関係を一歩深く考えるきっかけとなる大切な学びです。

（写真・文　プロダイバー／環境活動家　武本　匡弘）

※今号から武本さんの連載がはじまります。（P.50）

福祉のひろば

2026年5月号

【ひろばトーク】
新たな社会福祉課題に挑み続ける
～大阪しあわせネットワークの挑戦～　大西　豊美　6

●特集●　たのしい、うれしい、おもしろいが生きる力に

〈座談会〉チャレンジを生きる力に
――児童養護施設でとりくむ冒険プログラム
立入　聡／加藤紀大／赤瀬正樹／元井隆蔵／武藤素明　10
チャレンジプログラムで卒園生のつながりも　東海林和也　22
「支えてもらって生きる」を感じられるように　大貫　祥太　24
わかりあい、つたえあえることで楽しみが広がって　四方　芙実　28

●サブ特集●　「危機シンポ」をふり返り、あらたな研究運動に

〈座談会〉　浜岡政好／井上英夫／河合克義／垣内国光　32

●トピックス●

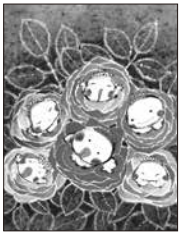
多文化共生社会を支える京都モアネットの実践　黄　驥　42
第39回社会科学・社会福祉基礎講座のご案内　46
第31回社会福祉研究交流集会in京都のご案内　47

●連載●

★新連載★海の中から地球が見える
第1回　何より知ってもらいたい！　武本　匡弘　50
『福祉のひろば』とわたし（2）
『福祉のひろば』のスタートにかかわって　福田　志朗　52
政治を見る目
第２回　総選挙のしくみを理解しよう　長澤　高明　54
世界と交流する平和の船に乗ってみた！（南半球編）
第２回　Toki音楽学校　イースター島はちいさな地球！
根津眞澄＋オット　56
世界のソーシャルアクション！　孔　栄鍾　60
韓国社会がたどった「不安」、そして「連帯」（韓国・後編）
ＪＯＢ＆ＡＣＴＩＯＮ　全国福祉保育労働組合（62）
3.5中央行動　議員要請などを展開　62
私の履歴書　社会福祉経営全国会議（62）
「福祉の芸術化」をめざして　原　慶子　64
阿修羅がゆく　わたしが好きな釜ヶ崎（82）　水野阿修羅　66
育つ風景　清水　玲子　68
わかろうとし続ける大人にしか見えない子どもたちのほんとうのつながり
映画案内　『男はつらいよ　寅次郎と殿様』　吉村　英夫　70
現代の貧困を訪ねて　生田　武志　72
大原孫三郎・總一郎、山川均・菊栄、石井十次
（その８・「パンとペン」の時代と日本共産党の誕生）
似らすとれーしょん道場　似顔絵まんがアート
まだまだ冬のオリンピックじゃ！　ラッキー植松　74
ホームレスから日本を見れば　ありむら潜　76
モトコの66歳えぶりでぃ　川口モトコ　77

みんなのポスト　48／福祉の動き　78／今月の本棚　81
●グラビア●　すべてのいのちに役割がある

●表紙の絵●
神門やす子



ひろば トーク

新たな社会福祉課題に挑み続ける

～大阪しあわせネットワークの挑戦～

大阪府社会福祉協議会 社会福祉施設経営者部会部会長　**大西 豊美**

二〇一五年度に誕生した「大阪しあわせネットワーク」（オール大阪の社会福祉法人による社会貢献事業）は、大阪府社会福祉協議会（以下、府社協）とその会員である社会福祉法人・福祉施設（二〇二六年三月現在、一五四六施設）が、施設種別を越えて連携・協働し展開してきた取り組みです。

その実践は、四つの柱によって支えられています。一つめは、制度だけでは支えきれない生活福祉課題に対し、総合相談をおこない、食料がない、電気が止まるといった緊急時には、現物給付による経済的支援を実施する生活困窮者レスキュー事業です。こうした支援は、孤立した生活困窮状態からの再出発を支えるとともに、世代を超えて続く「貧困の連鎖」を断ち切ることをめざす取り組みでもあり、人の尊厳を守る最後の砦としての役割を担っています。

二つめは、社会福祉法人の強みを活かした地域貢献事業です。福祉専門職や施設機能を活用し、地域ニーズに応じて、社会参加や生きがいづくり、居場所づくり、就労支援、子育て支援などの取り組みを開発・展開しています。

三つめは、分野や立場を超えた連携を進め、重層的に支える基盤づくりをおこなうとともに、大阪らしい包括的支援体制の構築にも挑戦しています。

四つめは、前述のような取り組みを継続するため、会員法人・施設が力を出し合い、互いに支え合うしくみとして、社会貢献基金を拠出・運営しています。

この一〇年間、私たちは地域で孤立し、さまざまな課題を抱える人びとの尊厳を守る

おおにし　とよみ

社会福祉法人みなと寮理事長。大阪府社会福祉協議会社会福祉施設経営者部会部会長、大阪府社会福祉協議会副会長、全国厚生事業団体連絡協議会会長、全国救護施設協議会会長、大阪民間社会福祉事業従事者共済会理事長を務め、広い視野で福祉の未来を見据えた取り組みを推進。

ことを使命に、歩みを重ねてきました。誰もが「自らの人生を生きる」というあたりまえの希望を持ちつづけられる社会であること。その実現のために、声なき声に耳を傾け、心に寄り添い、ともに歩む姿勢を大切にしてきました。生活困窮の状況にある方の尊厳を守ることを何よりも重んじ、「人と人とのかかわり」に向き合いつづけてきた日々の実践こそが、大阪しあわせネットワークの土台です。

しかし今、少子高齢化や孤独・孤立、生活困窮、災害リスクの高まりなど、地域を取り巻く課題はいっそう複雑化・深刻化しています。一つの機関、一人の専門職だけでは応えきれない時代となりました。だからこそ求められるのが、「連携」と「協働」の深化です。行政、社会福祉法人、社会福祉協議会が同じ方向を向き、分野や立場を超えて力を持ち寄り、包括的かつ重層的な支援を展開していくこと。その結節点として、社会福祉法人が果たす役割は、これまで以上に大きくなっています。

生活困窮者支援をはじめとした福祉的支援は、個人情報の保護や尊厳の保持の観点から、地域には見えにくい側面があります。だからこそ、地域のみなさんに社会福祉法人がおこなう公益的な取り組みを知ってもらい「なぜそれらの支援が必要なのか」という理解を深めていただき、「自分も協力したい」と思ってくださる地域の力を広げていく。その先に、地域共生社会の実現があると私は信じています。

これまで培ってきた信頼と経験を礎に、人と人とが支え合い、ともに生きるという原点を見失うことなく、大阪から持続可能な地域福祉の未来を切り拓いてまいります。

特集

現場から見える、「生きる力」になるもの

二〇二五年の小中高生の自殺者数は五三八人で、統計のある一九八〇年以降で最多となりました。全体の自殺者数は一万九一八八人で、統計を開始した一九七八年以降ではじめて二万人を下回り最少となったいっぽうで、子どもの自殺者数は増加・高止まりしています。左の経年推移をみると、男子は横ばい傾向に対し、女子はここ五年に急増しています。国際的にみても、G7（アメリカ、フランス、ドイツ、カナダ、イギリス、イタリア）における一〇～一九歳の死因において、自殺が一位になっているのは日本だけです。

背景として、孤立やSNSの影響など、さまざまな要因が指摘されていますが、いまの日本の社会のなかで、子ども・若者が深刻な生きづらさを抱え、生きていたくないと思わせてしまうほどの状況に追い詰められていることは、深刻な社会問題です。

子ども・若者に限りませんが、福祉の仕事は、そうした生きづらさを抱えた人たちと出会い、ともに悩みながら信頼関係を築き、人生のこれからを一緒に考え、つくっていく仕事です。今号の特集では、児童養護施設での冒険プログラム、チャレンジプログラムのとりくみを中心に、障害分野の実践、高齢分野の実践と合わせて、「生きる」を支える福祉現場の実践を紹介するとともに、その生きづらさの背景にある社会問題へのアプローチと可能性について、考えたいと思います。

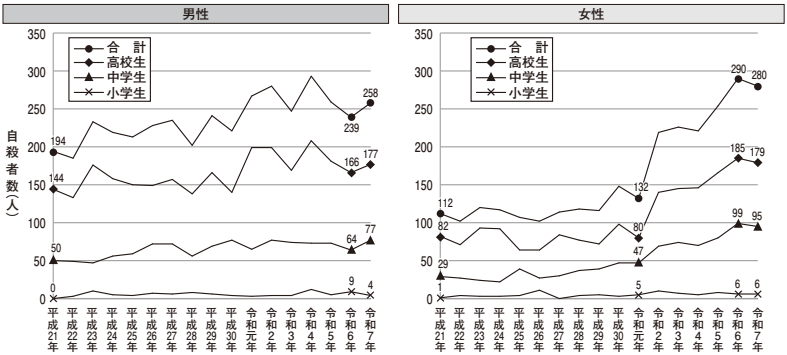
たくさんの経験をとおし、自分がたのしいと思えること、自分はこれが好きかもしれないと思えること

を見つけられる環境が保障されること。そうした経験をなかまと共有できること。一つひとつの経験が自信や生きる意欲につながっていく過程。自分が苦しいと思うことに真剣に寄り添おうとしてくれる人がいること。言葉がなくても手話ができなくても、伝えたいことや思いを知ろうとしてくれる人がいること……特集のなかでおうかがいしたみなさんのお話からは、小さなうれしい、たのしい、おもしろいの積み重ねが、生きていく力になっていくことを感じます。福祉現場の実践には、生きづらさを軽減するために必要なこと、そのためのヒントがあふれています。そうした実践からは、人が生きていくうえですべての人に保障されなければいけないこと、生きていくうえで不可欠なもの、その先にある社会のあるべき姿が見えてきます。

サブ特集では、社会福祉研究交流集会の前身である「危機シンポ」の歴史をふり返り、そこにかかわった方々の思いをうかがうなかで、一つひとつの現場の実践、現場から見える生きづらさを研究や運動につなげていくことの意義と大切さを考えました。目の前にいる人の困難の背景にある社会問題に目を向け、実践・研究・運動がつながりながら社会を変えていく。そのことを、一つひとつ積み重ねていきたいと思いました。

（編集主任・申　佳弥）

小中高生別、性別自殺者数の年次推移



出典）令和７年中における自殺の状況（厚生労働省自殺対策推進室・警察庁生活安全局生活安全企画課）より一部抜粋